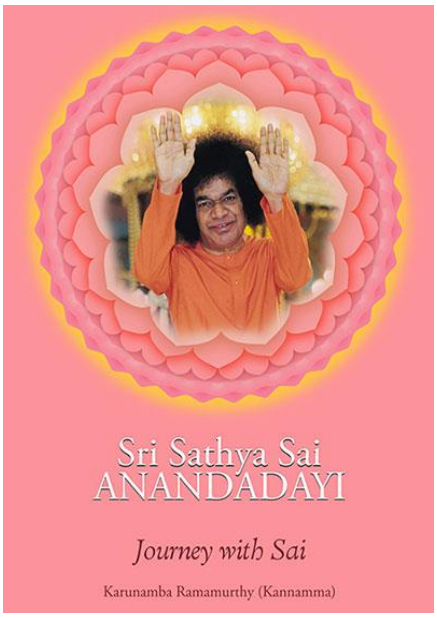
サイ・クリシュナの神秘なる戯れ

クリシュナ神が真夜中にお生まれになった時、自然界は天空の慈雨と稲光でこのことを知らせました。サティア・サイが降誕なさった時、ラージュ家の人々は、真夜中に太鼓がひとりでにリズミカルに鳴り響き、タンブーラが「ビョーン」と鳴る音で目を覚ましました。

神聖な蛇、アーディ・シェーシャは真っ先に現れ、クリシュナを「守ろう」としているかのように見えましたが、実際は、自分の主人の新たな愛らしい姿を見るために真っ先にやって来たのでした。カリユガ〔暗黒の時代〕も同様でした。小さなサティヤがベッドの上に寝かされるやいなや、シーツの下から、たいへん崇拝されているコブラが現れました。またもやコブラは真っ先に主に触れようと、待ち構えていたのです。バーラ・ゴーパーラ〔牧童クリシュナ〕はその魔法のような笛の音で皆を魅了しましたが、小さなサティヤはパンダリ・バジャン・グループ〔ババが 7 歳の時に 18 人の少年を集めて結成したバジャン・グループ〕の歌声で、プッタパルティの人々を魅了しました。



クリシュナが甘美な悪戯にふけっていたとすれば、それはサイにも受け継がれていました。2 人ともそっと巧妙に家から抜け出して、ハートが神の御名と御姿で満ちている人々のもとに行く方法をよく知っていました。奇跡の日々は終わりました。より大きな力と至高の権威でメインコースを届ける時が来たのです。それは、神のハートから湧き上がった天上の詩（うた）、『バガヴァッド・ギーター』です。最も新しい現代のアヴァター〔神の化身〕もまた、何十年もの間、数えきれないほどの不朽の御講話を通じて、『バガヴァッド・ギーター』を発展させ、さまざまな方法でこれを説かれました。

クリシュナの人生について読んだり思いを巡らしたりする時、人はスワミのことを考えずにはいられません。もしサイと一緒に生活したり、サイを間近で見たりしたことがあるのなら、こう言わずにいられないでしょう。「彼はなんと予測不可能なのだろう！なんという不思議なやり方だろう！　サイは、クリシュナにそっくりではないか！」と。

この魅惑的なサイ クリシュナの姿を垣間見ていただくために、カルナンバ・ラーマ

ムールティ女史の人気を博した著書、『シュリ・サティヤ・サイ・アーナンダダーイ』の中から、幾つかのエピソードを選りすぐりました。

1 つ目のエピソードは、サイ ババが本当はどんな存在であるかを最もドラマチックな方法で力強く明らかにしています。2 つ目のエピソードは、プラシャーンティ・ニラヤムに足を踏み入れることがどれほど幸運なことであり、その行為が何をもたらすかを改めて示しています。3 つ目は、1940 年代のスワミの日課を手短に美しく描写し、主がこの地上の束の間の滞在期間中に、どのようにして文字通り神のメッセージを生きられたのか、その一部始終を垣間見ることができます。それでは、サイ・クリシュナ・リーラームルタム——サイ・クリシュナの甘美な戯れ——というご馳走をどうぞ満喫してください！

カルナンバ女史 著

彼はマーナヴァ（人間）ではなくマーダヴァ（神）

1949 年の 4 月、私の母は 1 人でプッタパルティを訪れ、1 カ月間滞在して戻ってきました。母の滞在中、チェンナイから 2 人の大学生がそこを訪れていました。スワミが彼らの夢に現れて、自分はプッタパルティにアヴァターとして降臨しているとおっしゃったのです。スワミは 2 人に、プッタパルティに来て神のダルシャンを受けるようにおっしゃいました。2 人はとても苦労してプッタパルティの場所を探し当てました。2 人はサーダカ（霊性修行者）だったのです。スワミは、アシュラムに居住しているシェーシャギリ・ラーオ氏を通して、マンディール〔寺院〕に入る前にチットラーヴァティー川で沐浴をするようにとの言葉を青年たちに送りました。そこで、2 人は川へ向かいました。とても興味深いことに、青年たちは宝石で飾られたアンクレット〔足飾り〕を付けた神の 2 つの御足が、魅惑的な音をたてながら 2 人を先導しているのを見ました。沐浴の後、2 人はそこら中に水しぶきをかけながら、衣服を洗い始めました。すると、小さな少年の姿をしたパーンドゥランガ〔クリシュナ神の別名〕のビジョンを見たの

です。神はご自分のピータームバラ（黄色い衣）をしっかりと掴んで、ピータームバラに水しぶきがかからないよう離れたり、しぶきがかからない時には近くに寄ってきたりしました。その場所のマハットヴァ（神聖さ）を不思議に思いながら、２人はヴィッタラ〔クリシュナ神の別名〕を称え、マンディールに戻りました。

すると再び、アンクレットの音をたてた先ほどの２つの御足が、青年たちをマンディールまで先導し、それから姿を消しました。その頃までに、スワミは美しいローブを着て、青年たちを歓迎するためにホールで待っていらっしゃいました。スワミを見るやいなや、２人は洗濯で濡れた衣服を手から落とし、スワミのもとへ駆け寄り、スワミを抱きしめ、スワミを誉めたたえ、泣きました。スワミはただそこに立って、微笑んでいらっしゃいました。

この騒ぎを聞いて、マンディールの他の帰依者たちがその場に駆けつけました。帰依者たちを見たスワミは、２人の青年たちの腕から離れようとされましたが、それはできませんでした。青年の１人が言いました。「盗人よ、あなたは皆を避けてここに来られたのですね。（アヴァターとしてここに降臨されたという意味）。あなたはカーシャーヤ・ヴァストラ（赤褐色のローブ）を身にまとい、神性を隠していらっしゃる。おおクリシュナ、おおゴーパーラ、なぜそのような髪の毛を生やしたのですか？　その髪型はシヴァ神にそっくりです。あなたはクリシュナのような衣を身にまとい、ラーマのように威厳がおありです。あなたをどなたとみなせば良いのでしょうか？ あなたなしでは生きられません。クリシュナ、クリシュナ、人間の姿をしたあなたを拝見できるとは、私たちはなんと幸運なのでしょう！」

帰依者たちの方を振り返り、その青年は言いました。「私の言葉を信じてください。このお方から去ってはいけません。もし去れば、２度と彼を取り戻せなくなります。このお方はマーダヴァ〔クリシュナ神〕です。マーナヴァ（人間）のように振る舞って私たちを惑わしているだけです。この黄金の機会を無駄にしてはいけません。人生の目的を全うしてください。私はこのお方をよく知っているのです」

青年たちはスワミを褒め称え、アーナンダシュル（喜びの涙）を流し続けました。２人を見て、他の帰依者たちもまた涙を流し始めました。スワミは悪戯っぽく微笑み、おっしゃいました。**「これはどうしたことだ？　彼は狂っているのですよ。なぜ、あなた方は彼の言葉を信じて、泣いたりするのですか？」**

しかし、その青年たちが到着する前、スワミは、２人の偉大なヴェーダーンティン（とても知識のある魂）がその日にやって来るので、スワミは首を長くして待っているのだとお話しになっていました。というわけで、帰依者たちはスワミが冗談をおっしゃっているのだとわかりました。帰依者たちはそこに立ち尽くし、青年たちが泣いているのを見つめていました。

それからしばらくして、スワミは青年たちの腕を解き、愛情を込めて２人を慰められました。スワミは帰依者たちに、食べ物を持ってきて青年たちと同じお皿で一緒に食べるようにおっしゃいました。それから、スワミは青年たちをご自分のお部屋へ連れていき、長い間話をしてから、翌日、家へお帰しになりました。

プラシャーンティのスタラ・マハットヴァ〔場の神聖さ〕

別の日の夕暮れ、バジャンはまだ始まっていませんでした。バスに乗り遅れた人々の一団がマンディールにやってきました。その一団のある女性が母の部屋に入ってきて飲み水を求め、どこで洗濯できますかと尋ねました。近くの用水路へ行くよう言われた女性は、母にその場所まで案内してほしいと頼みました。母は短い道のりをその女性と一緒に歩き、場所を示してから戻ってきました。その女性が帰ってくる頃までに、スワミは今まで一度も着たことのないパロットグリーン〔暗い黄緑色〕のローブを着て、ホールに立っていらっしゃいました。髪はきちんと梳かれ、キンマの葉を噛んでおられました。

そしてスワミを見たとたん、その女性は「ああ、私の愛するヨーギの王よ！」と叫んで、中庭で意識を失って倒れました。

しばらくして、その女性は意識を取り戻して言いました。「このところずっとどこに隠れていらしたのですか？」　そう言いながら、彼女はスワミのもとへ走り寄り、スワミを抱きしめようとしました。スワミはバジャンホールのカーテンの後ろに隠れ、カーテンをギュッと掴みました。その女性はカーテンを動かせなかったので、そこら中を走り回って探し、「クリシュナ、クリシュナ」と叫びながら意識を失って倒れました。スワミはすぐにカーテンから出てきて彼女に駆け寄り、水を持ってくるよう求め、その女性の顔に水を振りかけて、ヴィブーティを塗りました。

スワミは別の女性たちに、その女性をうちわで扇ぐようにおっしゃいました。そしてアクシャタ（黄色い米粒）を持ってくるよう頼み、それを女性に振りかけました。その後、女性は息を吹き返す度に走り回ってスワミを探し、「クリシュナ、クリシュナ」と叫びながら倒れました。

これらの一部始終を見て、その女性の夫は怒りだしました。狂った人のように振る舞う妻を叱りつけ、静かにしているように言いました。スワミはその夫におっしゃいました。「ナイナ（親愛なる人よ）、叱ってはなりません。これがスタラ・マハットヴァ（場の神聖さ）なのです。ここに来たとたん、こんな風に影響を受ける人もいるのです」

夫はそれに答えて言いました。「マンディールのご聖像の数々に何か神秘的な力があるに違いありません。それが、妻の奇妙な振る舞いの理由かもしれません」

その女性は一晩中起きていて、ずっとクリシュナを瞑想していました。

朝になり、母はその女性のところに行って、何が起こったのかを尋ねました。女性は言いました。

「アンマー〔お母さん〕、あのお方はゴーパーラ クリシュナ〔牧童のクリシュナ〕です。人間だと思って騙されてはいけませんよ。昨夜は一晩中、ゴーパーラがうちわで私を扇いで、ヴィブーティを塗ってくれているのを見ました。あなたは彼を見なかったのですか？」

皆、同じホールで寝ていましたが、他に誰１人この出来事を見た者はいませんでした。翌日、皆の帰る準備ができた時、スワミは女性の夫に告げられました。**「どうか彼女をそっとしておいてくれませんか。彼女はもう１５日以上生きられないのです。彼女のクリシュナに対する熱狂を止めることはできません。これは、彼女の最後の人生なのです」**

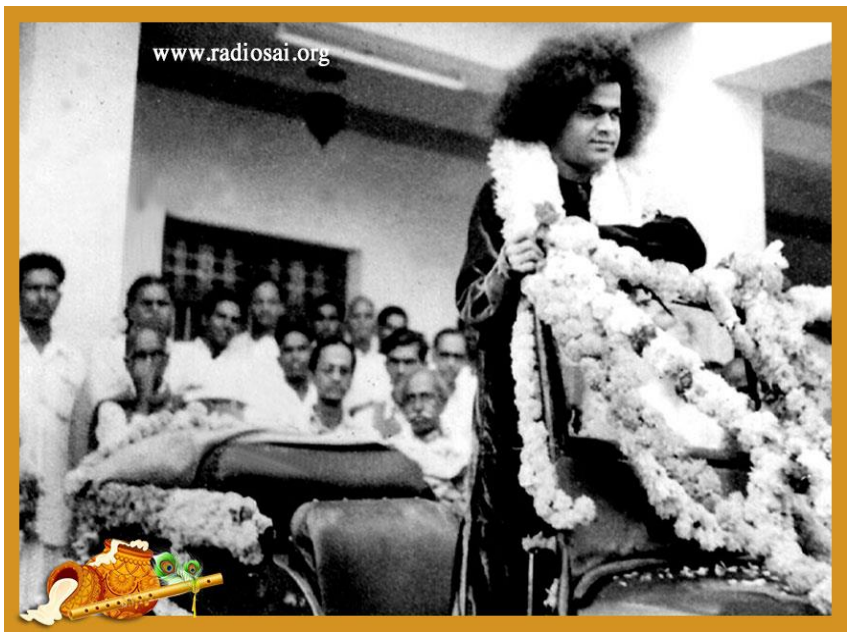
後になって、その女性は過去 12 年間、アンダル〔南インドのタミルの女聖者。歌によりクリシュナを信奉していた〕を崇拝していたことがわかりました。スワミが予言なさったとおり、その女性は安らかに亡くなったそうです。

サイ クリシュナはどのように一日を過ごしていたか

夜明けになると、スワミは起き上がり、顔を洗い、帰依者たちが捧げた温かい飲み物を飲み、楽しそうに動き回って、優しく彼らに語りかけられました。午前９時に、スワミがシャ

ワーを浴びられた後、帰依者たちは準備していた朝食をスワミに捧げます。スワミはそれぞれ少しずつ召し上がり、冗談を交わし、プラサードとして皆に同じものを分け与えられたものでした。

朝食後は、誰でもスワミにパーダ・プージャー（スワミの御足に礼拝すること）を行うことができました。マンディールに古い籐の椅子があったのですが、それをホールに設置して、スワミはそこにお座りになったものでした。次に、スワミの御足を平皿の上に乗せていただくようお願いし、香りのついた水で御足を洗い、タオルで拭いて、アリシナ〔ターメリック〕とクンクマ〔サフラン〕を塗ります。そしてスワミに花輪を掛け、ナイヴェーディヤ〔供物〕を捧げ、スワミはそれを少しだけお召し上がりになるのです。アーラティー〔灯火式〕の後は、全員がパーダ・ナマスカール（御足への礼拝）を行いました。パーダ・プージャーを行なっている間、スワミはよく、機械的に儀式を行うのではなく、神への愛を込めて歌うように、とおっしゃったものでした。



バジャンは午前 11 時ごろに始まりました。バジャンに厳格な時間はもうけられていませんでした。それは、現在歌われているようなナーマーヴァリー（神の御名のみ）で構成されていたわけではありません。ほとんどのバジャンは長い歌になっていました。バジャンは誰でも歌うことができました。スワミは「オーム」の石板に座って歌われたものでした。スワミの長姉のヴェーンカンマ様もスワミと一緒に歌われていました。会場は小さく、男性と女性は両サイドに座っていました。いく人かの男性がスワミの後ろに座り、スワミをうちわで扇いでいましたが、にもかかわらず、スワミのローブは猛暑のために汗でにじんでいました。その後、スワミはアーラティーを執り行い、皆にプラサードを配られていました。

午後１時には、皆が昼食のために集まりました。スワミは朝食の時と同じように、皆から少しずつ食べ物を取り、それらを混ぜ合わせ、少しだけ召し上がると、残りをプラサードとしてお配りになりました。その後、少しの間お休みになりました。その当時から、スワミは決して甘いお菓子やギー〔液状バター〕、牛乳、凝乳を召し上がろうとはしませんでした。

帰依者たちがその理由をしつこく尋ねると、スワミは、クリシュナ・アヴァターの時代にもう十分食べたから、とお答えになりました。

午後４時になると、スワミは帰依者たち全員を川床へ連れて行き、広々とした砂地の上に座って歌われ、帰依者たちにも歌うようにおっしゃいました。スワミは砂から聖像や果物、ヴィブーティ、甘いお菓子、辛味や塩気のあるお菓子などを物質化して、そこにいるすべての人にお配りになりました。また、霊的な事柄についてもお話しになり、帰依者たちは喜びと不思議な気持ちでそのお話を楽しんだものでした。

そのようなある折、スワミは砂地からリンゴを１つ取り出され、４等分に大きく切り分けて、そこにいた約５０人の帰依者たちに分け与え始められました。４つに切り分けられたリンゴは何倍にも増え、皆が一切れずつもらうことができたのです！スワミはよくこうおっしゃったものです。**「私が意志すれば、その対象物は私のもとにやって来ます。私はサンカルパ・スィッダ（意志するだけで何でも起こすことのできる者）であって、スィッダ・サンカルパ（厳しい霊性修行の後に力を獲得した者）ではありません」**

マンディールに戻る道中、スワミは前を歩いてご自分の歌の後に続くよう助言されました。マンディールでしばらくの間バジャンを歌ってから、アーラティーのすぐ後、皆で夕食を摂りました。夜には、スワミが松明を持ってマンディールの周りを歩かれました。当時のプッタパルティには蛇やさそりがたくさんいました。私たちは一緒に暮していたのです！ところが、スワミの恩寵のおかげで噛まれた者は誰もいませんでした。犬や猫でさえ、マンディールの中を自由に動き回っていたものでした。

スワミはすべてのバジャンが書かれた分厚いノートを持っていらっしゃいました。バジャンのメロディーや歌詞を忘れた時は、スワミにそのノートを見せてくださいと頼みます。スワミはノートを差し出し、メロディーを教えてくださり、歌詞を書き写してからノートを返してくれればいいよ、とおっしゃいました。

プッタパルティの周辺の村人たちは、よく集団でやって来て、マンディールでプージャーを執り行い、自分たちにプラサードを与えてほしいとスワミに頼みました。スワミは喜んでその願いを叶えられたものでした。

朝や夕方、スワミはよく帰依者たちを乗せた牛車の到着をマンディールの門前で待っていらっしゃいました。牛車にいっぱい乗った帰依者たちを見たとたん、スワミはとてもお喜びになり、元気ですか、昼食やティフィン〔軽食〕は食べましたかと尋ね、幸せそうに彼らと一緒に歩かれたものでした。

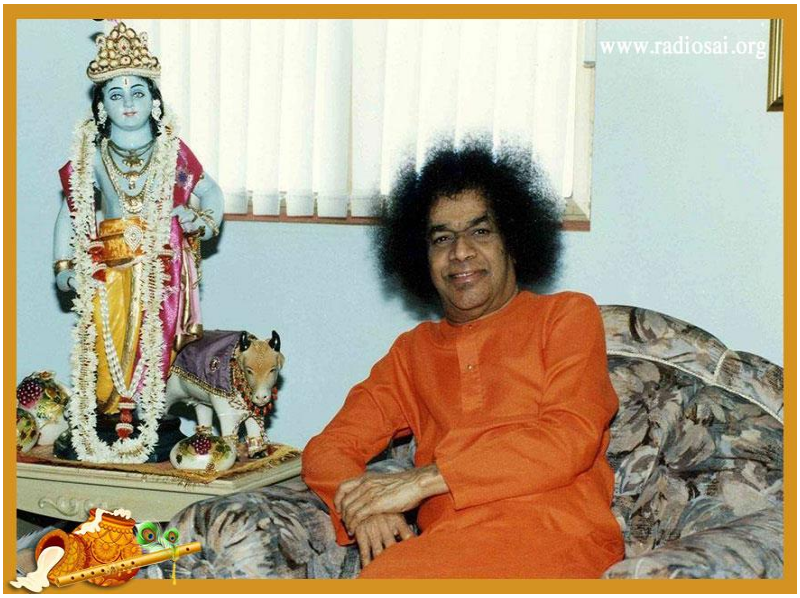
門で待っている間、スワミは暑い日差しの中、何時間も畑で懸命に働いている農夫たちに同情していらっしゃいました。農夫たちは勤勉な労働に見合うだけの報酬を受け取っておらず、その労働の果実を別の人が得ていることを嘆かれていました。

プッタパルティでは、牛乳や凝乳は朝にしか手に入りません。夕方のために保管しておかなければなりませんでした。プッタパルティにいる多くの犬や猫たちがこの仕事をとても難しくしていました。牛乳や凝乳を入れている容器を安全に保管する場所がありませんでした。ずっと見張っていなければ、動物たちが勝手に容器のふたを開けて、中の物をムシャムシャ食べてしまうのです。さらに悪いことに、容器ごとどこかへ持って逃げてしまうこともありました。かつて、ひどく取り乱したある帰依者が窮状を嘆いてスワミに訴えたことがありました。スワミは次のように言って彼女を諭されました。**「私は、犬や猫を見張るためにここにいるわけではありません。ですが、あなたが誰の感情を傷つけたかは間違いなく見張っています」。**

プッタパルティの焼けつくような猛暑は、私たちの苦しみをさらに増しました。しかし、皆スワミの近くにいたがって、家や馴染みの人々のもとへ帰る時が来ると、悲しくなって、涙ぐんでしまうのでした。

今日でさえ、スワミの神性の顕現を疑って、それを魔術だ、手品だ等という人々がいます。しかし初期の頃、疑り深い人がもっと大勢いると予測するのは自然なことでした。疑り深い人々の思いを知っていたため、スワミは、彼らに広大な川床のどこからでも一握りの砂を持ってきて、その砂から何でも望みの物を願うように、とおっしゃいました。そして、願った人々はそれを手に入れたのです！

称賛も非難も共に気にすることなく、スワミは帰依者たちのために次々と奇跡を起こされました。その頃、奇跡を起こす本当の目的を知っていたのはスワミだけでした。奇跡をぼんやり眺めている者もいれば、畏怖と不思議な気持ちで見ている者、喜んで見ている者もいました。どれほどの忍耐と根気を持ってスワミは帰依者たちの目を少しずつ開き、これらの奇跡の本当の意図と目的を理解させてくださったことでしょう！　しかし、この初期の頃でさえ、私たちは何となく感じていたのです。本当の喜びとは、スワミから何かを求めたり得たりすることではなく、ただスワミにお会いし、スワミと一緒にいることだけだったのだと。

ラジオ・サイ・チーム

出典：http://media.radiosai.org/journals/vol_12/01AUG14/The-Mystical-Sport-of-Sai-Krishna.htm